

ハワイ人キリスト教徒とカフナ

キャンパスの黒魔術

「アキ、先週の授業で面白いことがあったんだ。教室に入ったら、いつもと違う妙な雰囲気だった。教卓の上を見たら、ティー・リーフに包まれた何かが置いてある。『これは何だい？』って尋ねても、誰も答ええないのさ。いったい何だったと思う？」オフィス・アワーに指導教授を訪ねると、彼は私の質問を受ける前に話し出した。「ティー・リーフに包まれた物なら、多分、ホオクプではないでしょうか。ローカルの学生からのプレゼントか何かでしょう。」と答えると、彼は分かっているなあと思いを振り、ニヤリと笑って、「ハワイのブラックマジックだよ！ 授業が終わった後、ハワイ人の学生がやって来て、『友達に先生にブラックマジックをかけるためにその包みを教卓に置きました。彼に代わって謝ります。』って言ってきたんだ。」と事の次第を説明した。「なぜ、そんなことをしたのでしょうか？」と私が聞くと、「その前の週の授業中に、カフナのブラックマジックなんか効かないって大見得を切ったんで、それに対する学生からのリアクションだったんだと思う。」との返答。「効くわけがないのにね」と余裕の笑みを見せながらも、彼は少し興奮気味にまくしたてた。

インターネットで「カフナ」を検索すれば、整体・マッサージやジュエリー・ショップに料理店などがヒットしてげんなりするが、カフナとは、広義には職能者（スペシャリスト）一般を意味し、狭義には神官、預言者、祈祷師、呪術師、民間医療師を含む宗教的職能者を意味する。ただし、現在では、それは呪術師または民間医療師の意味で用いられることがほとんどである。ハワイの伝統文化についてよく知らな人であれば、「カフナ＝呪術師」と見なすことも多い。すでに紹介したように、カフナの存在はハワイのキリスト教化の過程で異教的なものとして抑圧されてきた。だが、彼らは完全に姿を消したわけではない。ハワイ人の文化的な会合や政治的な集いに彼らの姿を見つけることは珍しいことではないし、冒頭のエピソードのようにちょっとした出来事に彼らの存在を垣間見ることもある。アウマクア（祖先神）と並んでハワイの伝統宗教を代表するカフナについて、会衆派ハワイ人教会の牧師や信徒がどのように考えているのかを知るために、1994年から96年に行ったインタビュー調査の結果から彼らの語りを紹介したい。

年配の男性牧師

カフナには異なるタイプがある。君も知っているように、カフナの行為には異なるタイプがあるんだ。ちょうどキリスト教の牧師が異なる行為を行うようにね。キリスト教の牧師の中には、より保守的な者もいれば、より原理主義的な者もいる。信仰治療を行う者もいれば、異言を操る者もいる。このように様々な種類の牧師がいる。一方、カフナ・ラアウ・ラバアウやカフナ・アナアナについて考えてみる。君も知っているように、それらはある特定の行為だ。私はカフナ・アナアナの行う行為には同意しない。だが、カフナ・ラアウ・ラバアウが同じように扱われるのは残念だ。その用語は呪医を意味していない。それは土着の薬草を使用する土着の治療師のことなんだ。そして、彼らの多くは古い神に祈る。彼らは迷信と共に育ったが、その植物

の利用法は伝統的な様式に則ったものだ。

まず、彼らは「アクアよ、私にこの植物を与えてくれてありがとうございます。私はこれを治療に使わせてもらいます。」と神に述べる。治療を施す前には、依頼人に「あなたも祈りなさい。」と命じ、「これらのことが効果を発揮するためには、あなたは霊的な生活を送らねばならない。」と告げる。だから、彼らの行いはキリスト教の信仰と一致する。なぜなら、私たちと同様に、彼らは信心深く神に問いかけているのだから。だから、私はカフナ・ラアウ・ラバアウを支持する。彼らは医者なんだ。つまり、彼らはハワイ文化における医師と考えれば良い。それから、カウンセラーの役割を果たすカフナもいる。彼らは、人間関係の問題を解決してくれる人たちだ。でも、私はカフナ・アナアナのすることには同意しない。私は、彼らが人を呪い殺すなんてことも信じない。もちろん、食べ物に毒を混ぜて相手を弱らせるといった技術的な方法はあるけれど。

年配の女性信徒

そうね、彼らには様々な種類があるわ。彼らは呪術を使うのよ。例えば、好きでもない人のことを好きにさせて、その人の後を追いかけるような呪術とか、それはもう、たくさんの種類があるの。彼らの中で良いものは、一つか二つしかないわ。その一つは治療を行う者。色々な薬草を使うのよ。それは私たちも教わったわ。でもカフナからじゃなくて、おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんとか、その使用法を知っている人たちから教わったの。私は教わったことを全て記録しようとしたわ。何の目的のために、どんな植物を育て、どのような使用法があるのかをね。でも、同時に教えられたのは、それらを治療に使う時には、ちゃんと神様に祈るということ。森の女神とかに祈るんじゃないの。だって、彼女は何も応えてくれないでしょ。私はそのように信じているわけ。だって神が全てのを授けて下さったのだから。でも、こんなことを言う人たちもいる。森はラカ（フラの女神）に属しているとか、ペレ（火山の女神）に属するレファの葉を採れば雨が降るとか。そんな時、私はこう言って返すの。「いい、よくお聞き。あなたがそのような悪い考え方を持てば、それは起こるかも知れない。でも、あなたが神と一緒にいてくれるようお願いすれば、レファの葉を採っている時も、何も変なことは起こらないの。」ってね。

白人の女性牧師

より保守的なハワイ人信徒の中には、土着の宗教の類を全て切り捨てるという宣教師の伝統を引き継ぐ者もいます。でも、ハワイ人信徒の中には「宣教師の宗教を受け入れたからといって、彼らの文化まで受け入れる必要はない。」と言う者もいると思います。でも、これはとても複雑な問題です。異なる人はこの問題をとても異なった仕方です。私は、教会の信徒とこの種の問題について直接話し合ったことはありません。でも、この緊張を何らかの形で経験している信徒は多いと思います。例えば、ある五十代の女性信徒はフラ・ハーウ（フラ道場）に属しています。また、時に何かが起こった時、例えば、家庭問題が身内の中で起これば、そのうちの何人かは

ハワイ人のカフナのところに行き、問題の解決を手助けしてくれるよう頼んだりするのは私は知っています。でも、彼らは決して私にそのことを話しません。私は後から間接的に知るだけです。ですから、そういう信仰が依然として残っているのは確かです。

年配の男性牧師

ここにあるこのヘイアウ（古代の礼拝場）にもカフナはいた。それがオブカハイアがこの地を離れニューイングランドに向かった理由だった。なぜなら彼は彼の祖父が何をやっているのを見ていたのだからね。ああ、彼の祖父はヘイアウの神官だったのさ。でも、今日、それほど多くのカフナは残っていない。まあ、カフナのやっていることは、運勢判断みたいなものさ。例えば、カフナが君に「あなたは病気になるだろう。」と言う。そして、次の2、3日で君は気分が悪くなる。5、6日経つと、もつともつと体調が悪くなる。暗示の力というものには確かにあつて、どういうわけか人は病気になったりする。続く2、3日も、依然として君は具合が悪い。そして、彼らは、病気になれ、病気になれ、病気になれと祈り続けるのさ。

彼らがある種の呪術的力を持っているのは確かだ。なぜなら、主は、私たちに、私たち一人ひとりにある才能をお与え下さっているのだから。一人ひとりに様々な才能を、ピアノをひく才能、説教をする才能、歌を歌う才能をお与え下さっているのだから。そして、彼らもある才能を、すなわち、祈って、祈って、祈って、人を殺してしまう才能を持っているのだ。実際、あの教会の墓地にも一人埋葬されている。アナアナを行っていた人がね。私が若い頃には、一人や二人はいたんだ。人々はとても彼らを恐れていた、誰も彼らと関係を持つとはしなかったよ。でも、今や誰も彼らのことを恐れたりしない。もちろん、彼らのことを馬鹿にしたりする人はいないが、彼らは四六時中恐れられる存在ではなくなった。まあ、確かに彼らはある力を持っている。今もアナアナを行う人、ラパアウを行う人はいる・・・

ラパアウについてどう思うかだつて？ そうだね、5年ほど前にハワイ人の宗教者のコンベンションを開いたことがある。およそ85名ほどの参加者があつた。会合を開き、共に祈りを捧げることになっていた。彼らは、葉や根など、葉草の類を携えて参加していたよ。コンベンションの開会式で、私が祈りを捧げることになり、「神よ、彼らにラパアウの技能をお与え下さり、誠にありがとうございます。」と祈りの言葉を捧げたら、彼らはとても怒ったね。「私たちは私たちの神々からこの能力を授かったのだ。」と言うわけさ。私に面と向かって「私はこの力を高祖父から授かったのだ。彼が私にこの力を授けてくれたのだ。あなたの神ではない。」と言う者もいた。開会式が終わると、7名ほどの参加者がすぐにその場から立ち去って、飛行機に乗って帰ってしまった。4日間の予定のコンベンションだったんだけど。

その時、ある参加者は私に「君は彼らの所に行つて、謝つた方が良い。」なんて言うんだ。でも、私はこう答えた。「いいや、謝罪するつもりはない。謝るつもりはないよ。」つてね。「彼らはどこからその技能を得ていると思う？ その力をお与え下さ

るのは唯一人。神だよ。残念だが、それが私が信じるものなんだ。だから、彼らの所に行つて、私の神の名を称えてすまなかつたなんて言うことはできない。彼が私のボスなんだから。」と言つたのさ。

年配の男性牧師

カフナという言葉には何の問題もない。カフナとは、その意味するところは、異教の存在なんかではない。それは聖職者という意味だ。カフナの訳語は、普通は司祭・僧侶なんだ。私としては、医療の専門家はカフナと呼ばれるべきではないと思う。時代遅れのものかもしれないが、医療の専門家と見なされるべき人はいた。良きにつけ悪きにつけカフナと呼ばれる医療に携わる人たちはいたんだ。端的に言えば、伝統医療に携わる彼ら全てをカフナとして一括りにするのは、とても悪いことだと思う。なぜなら、カフナという言葉自体があまりにも悪い印象を与えてしまうからね。

年配の女性信徒

あなたに私のバックグラウンドについて少し話す必要があるわ。私はね、カフナの家系の出身なの。祖先はカフナだったのよ。あなたもよく知っているように、カフナには非常にたくさん種類があつた。で、私の曾祖父母、特に私の曾祖母は、おそらく、あなたたちが魔術師、魔女と呼ぶような存在だったの。そう、アナアナね。でも、私たち家族に対しては、彼らはアナアナなんかじゃなかった。彼らは皆、治療者だったのよ。でも、彼らの中のごく少数の人間が、その力を悪用したので、彼ら全てが呪術師、魔術師と呼ばれるようになったわけ。

私の父もその伝統を引き継ぐべく訓練を受け、私の曾祖母の最後の息を受け継ぐことも教わっていたの。伝統を引き継ぐためには、曾祖母がかつてそうしたように、彼も彼女の口に自分の口を重ねて、彼女の最後に吐く息を吸い込まなければならなかった。そうすれば彼は偉大な霊力を引き継ぐことになるの。ええ、ハワイは大きく変化していくところだった。父は1890年に生まれたのだけれど、彼が物心つく頃にはハワイ王朝は滅亡していたし。また、私の曾祖母はハワイが激変していくことを予見していたわ。そして、すでにカフナ・アナアナは、私たち一族は、地下にもぐっていた。秘密裏に儀式を行っていたということね。公に行うことなんかできなかったのよ。

そのようにして過ごしているうちに、ある日、彼女は私の父を死の床に呼んでこう言ったの。「お前に教えたことは全て私が持ち去っていく。そうすれば、お前は自由に自分の道を歩むことが、母親の選んだ宗教を信仰することができるだろう。」つて。私の祖母は、その時すでにキリスト教徒になっていたの。ええ、彼女は幻覚か何かその様なものを見て、キリスト教徒になると決意したのね。古い宗教とはきっぱり縁を切ると。父が言うには、その頃には彼は私の曾祖母から教わつた全てのこと、聴くこと、視ること、感じるができなくなつていた。彼女の最後の言葉に、彼ははつと我に返つたという感じがしら。そうして、子供である私たちはキリスト教徒として育てられることになつたのね。80年代に入るまで、ハワイの宗教については、家族の間で決して話し合うこともなく。